ヒロシマ40年

段原の700人
アキバ記者

中國新聞社編

未來社

ヒロシマ40年

段原の700人
アキバ記者

中國新聞社編

未來社

ヒロシマ40年　——段原の700人／アキバ記者——

1986年4月8日　第1刷発行

定価 2500 円

編　者　中　國　新　聞　社

発行者　西　谷　能　雄

発行所　株式会社　未　來　社

東京都文京区小石川3—7—2
電話　(03)814—5521
振替・東京　7＝87385

印刷・製本　図書印刷

はじめに

ヒロシマは昨夏、被爆四十周年を迎えた。この大きな節目に当たり、中国新聞社は四つの重点紙面企画を展開した。本書はそのうちの後半の二シリーズ、「段原の七〇〇人」と「アキバ記者」を収録している。

「段原の七〇〇人」は、被爆後四十年の歳月の流れの中で、被爆者援護など〝原点〟の諸問題を改めて問い直したものである。

広島、長崎を合わせて全国で三十六万七千人（手帳保持者）を数える原爆被爆者の援護問題は、いま大きな転機にあり、新たな展開を必要としている。被爆者たちの老齢化がさらに進み、健康・生活不安が深刻化する中で現行の原爆二法（原爆医療法、被爆者特別措置法）に基く国の施策の限界が一層あらわになってきた。しかし行政も運動団体も、今後の被爆者対策がどうあるべきかについて確たる方向を見出しかねていた。

私たちは、それは関係者が被爆者たちの現状を、心情をも含めた生活実態を正確に把握していないためではないかと考えた。そこで広島市段原地区の一開業医が、昭和三十年に作成した七〇〇枚の被

爆者検診カードを手がかりに、カードの主を一人ひとり掘り起こし、これをもとに被爆者援護と施策の新たな方向を提言した。

この七〇〇人の追跡取材は、ただ単に被爆者対策の前進だけを意図したものではない。核兵器の想像を絶する物理的な破壊力とともに、それがもたらす人間的悲惨、被爆者たちの終わることのない心身両面の苦しみを広く知ってもらい、「核時代」への警鐘とするためである。

一方「アキバ記者」は、「ヒロシマの世界化」の問題を検証し、課題を明らかにした立体企画である。アキバ記者とは、米タフツ大学准教授、秋葉忠利氏の提唱で広島国際文化財団（中国新聞社と中国放送が設立・運営）が実施している「アキバ・プロジェクト」によって、毎夏、広島と長崎に招請している海外ジャーナリストをいう。被爆体験の世界化を効果的に推進するのが主なねらいで、昨年夏までに六回、米国を主体に二十一人の記者を〝原点〟に招いている。

被爆四十周年を機にその後の活動ぶりを現地に追い、また記者たちの参加を得てシアトルで現地シンポジウムを開催するなど、多角的に今後の指針をさぐった。

この両シリーズは、「ヒロシマ40年報道」として昭和六十年度の日本新聞協会賞（キャンペーン、連載企画部門）を受賞した。授賞理由の中に「これらの報道は、広島に本拠をもつ新聞社の使命感と義務感を遺憾なく発揮したものである」とあるのは非常にうれしい。

いま世界の核状況は、危機的な様相を一層深めている。米ソを筆頭とする核保有五ヵ国の核兵器の総数は五万発を超え、核軍拡は宇宙空間にまで及ぼうとしている。このような時に、本書が核兵器の

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ない世界の実現に役立てばまことに幸いである。

昭和六十一年二月

中国新聞社
編集局長　尾形幸雄

ヒロシマ40年　段原の七〇〇人・アキバ記者

目次

はじめに……一
第一部　段原の七〇〇人……九
七〇〇冊の〝原爆手帳〟を追う……一一
第1章　カルテの二八人……二三
第2章　二〇三人の死から……九一
第3章　一五八人の転居者たち……一三七
第4章　実態調査から……一六九
第5章　意識調査から……二二三
七〇〇人のカルテの復元……二七二

第6章　復元カルテからの提言……二九七

第二部　アキバ記者……三二九

被爆の実相世界に……三三一

第1章「彼方のヒロシマ」……三三七

第2章　アキバ記者シンポジウム……三九一

第3章　アキバ記者リポート……四一五

あとがき……四四九

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

第一部　段原の七〇〇人

平均年齢　六五・八七歳
孤　老　八人に一人
病　気　五七%
生活不安　二人に一人

老いての独り暮らしは寂しい。8年前、やはり被爆者だった夫を亡くした渡瀬スヽミさん（72）は信仰だけが生きがい。生活を切り詰めては、四国の札所巡りに出かけて行く

広島市段原地区は、爆心から約二㌔離れた所にある古いたたずまいの街である。比治山の陰になって焼失を免れ、生き残った人々や、避難して住みついた人が力を合わせてつくった「被爆者の街」でもある。「段原の七〇〇人」シリーズは、この街の開業医が昭和三十年に作成して残していた七百枚の被爆者検診カードを手がかりに、その主を捜し出し、生活史と現状を探ることによって「被爆者援護」を模索した。遠く米国にまで及んだ追跡取材には、多くの困難が付きまとったが、最終的に六百四十八人（九三％）の消息をつかみ、「カルテの復元」にこぎつけた。「全体像がわからずして、援護の道は開けない」という私たちの主張は反響を呼び、厚生省は初の死没者調査を含む全国被爆者実態調査の今秋実施を決定。その結果をもとに「原爆被災白書」をまとめ、被爆者援護に反映させることになった。

七〇〇冊の〝原爆手帳〟を追う

四十年の夏、広島市の中心部からやや東、比治山の陰で原爆による全壊を免れた南区段原地区。生き残った被爆者、そして家を失ってここに住みついた被爆者が肩を寄せ合って生きるこの街で、被爆後十年たったころ、一人の開業医が街中の被爆者に一人残らず私製の原爆手帳を配り、検診を呼びかけた。比治山と国鉄宇品線の線路に挟まれた段原新町、段原東浦町、段原末広町、段原中町、段原大畑町、南段原町の六町を合わせて、手帳を受け取ったのはちょうど七百人、そのうち二百三十一人分のカルテが残された。その中にはっきりと刻まれた原爆のツメ跡。それから三十年、老いを重ねる被爆者たちの健康を今なお見守り続けるこの医師の周辺には、ヒロシマの一つの縮図がある。

「四十年近く被爆者を診察し続けて言えるのは、非被爆者に比べて病気にかかりやすいし、貧血などの再発率も高く、ハンディを抱えて生き続けている人たちの集団だということだ」

被爆以前に建てられた木造の低い家並みと細い路地が入り組む広島市南区段原新町。中山医院の主、中山広実医師[1]（七一）はひと言ひと言、慎重に言葉を選んだ。病院兼自宅の木造二階建ての建物は、

原爆投下の翌年に開業した当時そのまま。玄関わきに掛けた「内科・放射線科・小児科　中山医院」と書かれた看板がなければ、普通の民家と見間違えて通り過ぎてしまう。

中山医師が開業したころから、原爆で焼け残った段原地区には市中心部などから家を失った被爆者が次々と流入し、医院を訪れる患者のほとんどを被爆者が占める時代が続いた。二十五、六年ごろからは盛んに「原爆症」という言葉が使われ、被爆患者の不安が膨らんでいた。

「来る患者、来る患者がみな、ちょっとしたことでも、私は原爆症ではないでしょうか、と心配するんですな。そんな病気はないと言っても信じない」。患者の中には、治療費も満足に支払えない人たちも多かった。そんな人たちが不必要な不安にさいなまれる一方で、発見が遅かったばかりに助かる人も助からない現実があった。

「医者として、何かできることはないか」。理事をしていた市医師会で、また、被爆者医療の問題を話し合う開業医の研究会「土曜会」の席上で、病気の早期発見と不安解消のため、被爆者の定期検診の重要性を説き続けた。だが、施設もなければ予算もない。広島県や広島市など行政による被爆者救援の態勢もまだ整っていなかった。

「自分でやる以外にない」。中山医師は自らの診察区域である段原地区を被爆者健康管理のモデル地区にしようと決意した。当時、四十歳になるかならない年齢。軍医として従軍したビルマのインパール作戦で、九死に一生を得て帰国、「残った人生は余りもの」と思っていた、という。

手始めに、地区の町内会長の協力を得て、段原六町の七百人を含む被爆者約二千人をカードにリストアップ。一人ひとりの住所、氏名、被爆地をつかんだ。次いで把握した被爆者全員に、私製の「被

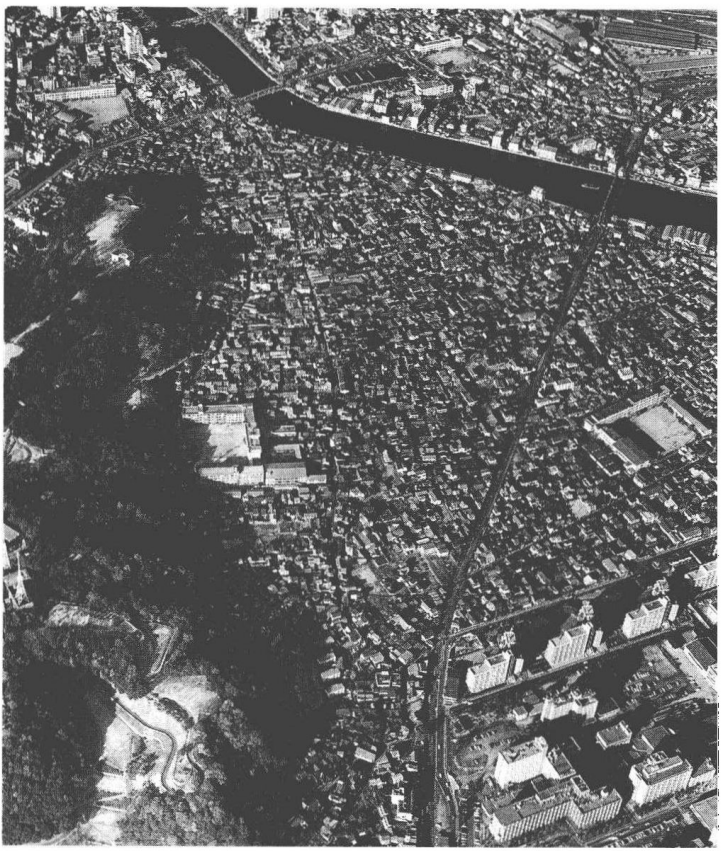
爆者健康手帳」を配り、その持ち主一人ひとりの検診活動を開始。内容を次々にカルテに記録した。手帳の検査項目は、後に原爆医療法によって被爆者に給付される被爆者健康手帳、いわゆる原爆手帳をそっくり先取りした形となっていた。

すべてが私費を投じての事業。〝中山手帳〟はごく短期間の検診とはいえ、段原地区の被爆者に健康管理の大切さを目覚めさせる呼び水になった。やがて二十八年に発足した旧「広島市原爆障害者治療対策協議会」（原対協）の活動が軌道に乗り、段原地区の検診システムを参考に全市的な被爆者検診体制に広がっていく。

それからほぼ三十年。中山医師は七十歳を超えた今でも段原の町医者として、毎日、地区の被爆者の診療を続けている。頭には白いものが増え、最近は腰も悪い。「患者も年をとったが、私も年をとったんですかな」と、大きな手を腰に当てる。訪れる患者のまだ半数を占める被爆者。「まあ、腰が立たなくなるまでは頑張りますよ」。昼の休診時間が終わると、大急ぎで白衣をはおり、患者が待つ診察室へ消えた。

二十年八月六日、広島市の上空五百七十㍍でさく裂した原子爆弾のせん光は、標高四、五十㍍の丘が連なる比治山の陰に抱かれた街、段原地区をも容赦なく襲った。爆心からはほぼ二㌔。一瞬の後、爆風が津波のように木造の家並みをなぎ倒して吹き抜けた。

その朝、中学一年の私のクラスだけ学徒動員の休日。家のそばの縁台で本を読んでいた。弟と妹、それに近所の女の子がスモウトリ草で遊んでいた。――そのとき、突然空が光り、身構える間もなく



比治山の東に広がる段原地区。焼け残った被爆前の家並みが続く街に、今も原爆の痛みを抱えた人々が住んでいる

強い力でたたきつけられた。近所の女の子は崩れた土壁にめり込んでいた。気がつくと兄弟三人がやけど。弟は背中一面をやられ、八日間「痛い、痛い」と泣き続けて死んだ＝段原中町、衣料品会社経営古谷勝さん（五）。

段原地区は大正末期から急速に開けたが、明治以来、軍都として栄えた広島市の中では新興の街。弁柄格子の民家と商店が二千軒余り。原爆投下の直前には約八千人が住んでい

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com